

## Q1 祇園橋はどこにあるの

祇園橋は、熊本県天草市の中心本渡の船之尾町と中央新町との間にあります。架橋当時は町山口村という地名でした。

祇園橋は、旧町山口村の町山口川の下流に、下島の南北を結ぶ往還橋として架けられました。石橋としては最初の架橋です。往還道は、下の地図のように、現在の本渡橋と諏訪橋の間にあつたようです。この往還道からや外れた位置に架けられたのは、この地点の川幅が広いことや頑丈な岩盤が無かったためかと思われます。

この辺りは、江戸時代の天草の首都が富岡町（現苓北町富岡）から、維新後、本渡に移されたことから、天草の中心として、町役場等が置かれ、また商店が立ち並び、賑わっていました。筆者の手元に、大正六年発行の『本渡案内』という地図がありますが、これを見ますと、郡役所、警察署、本渡町役場、税務署などの官公署（所）がこの地に集中しています。また、学校や商店、旅館などが所狭しと建っています。

大正六年ですから、架橋からずいぶん後（84年後）になり、当時とは比較にならない発展を遂げています。祇園橋からは、横道に逸れますが、ついでにこの地図に書かれている興味深いものについて、記して見ましょう。

船着場は諏訪橋で、ここから三角行、茂木（長崎県）行、牛深行それぞれ一便出ています。魚市場が現在の銀天街にあることから、大正時代でも、現在の五間道路付近は海でした。また、発電所も諏訪橋のすぐ近くに建てられています。

また、当時の本渡町の現況も載っています。それによると、戸数一千戸、人口四、九五九人とあります。ちなみに天草郡全体では、二十一万六千五百四十八人とあります。現在は天草島全体で、十二万人余ですから、ずいぶん多かったのですね。



でも、戦後、官公庁の移転や郊外の大規模商店の登場で、かつての中心街は近年さびれつつあります。

また、寛永十四（1637）年の天草島原の乱では、この祇園橋付近一帯で、唐津軍と一揆軍とが衝突・激戦が繰り広げられ、川の水は戦死者の血で真っ赤に染まったと言われています。前ページの地図を見てもらうと、千人塚発掘の地がみられます。（天草の乱については後述）

さらに、昭和三十九（1964）年には、中央商店街で全半焼百三戸という本渡大火災が発生しています。

ちなみに、町山口川には、石橋としては、祇園橋の約<sup>2</sup> Km上流に、施無畏橋という眼鏡橋が架けられています。この橋も、立派な石橋です。

（p41天草の石橋めぐり参照）

## Q2 なぜ祇園橋と名前が付いたの

祇園橋架橋当時は、名前はなかったのですが、この橋の左岸に祇園神社があることから、何時の頃から祇園橋と呼ばれるようになったようです。祇園橋の際に、架橋記念碑が建てられていますが、ただ石橋と記銘されていません。

昔は橋の数も少なく、特に橋に名前を付ける必要がなかったのかもしれませんがね。祇園橋と呼ばれるようになったのは、いつからか定かではありません。ただ祇園橋という名はいい響きを持っています。たまたま祇園社があったから付いた名ではありますが、もし他のダサイ名前だったらこれほど有名にはなっていないかもしれません。もし前に、祇園神社がなかったら、なんと呼ばれていたでしょうか。あなたなら、なんと名前を付けますか。親は生れた子に、苦心惨憺して、名前を付けるのが普通ですが、名前はやはり重要です。



祇園（八坂）神社と神社から見た祇園橋

〔蒔蓄〕ウイキペディアより

祇園神社は正式には八坂神社。神仏分離以前は、現在主祭神とされているスサノオが、祇園精舎の守護神である牛頭天王と同一視され祀られていた。明治以後は、仏教の神である牛頭天王は祭神から外され、スサノオだけが祀られている。総本社は京都の八坂神社。したがって祇園は愛称。しかし、祇園祭など、祇園という名は各地の地で親しまれている。

### Q3 祇園橋はいつ架けられたの

祇園橋は、天保五年に竣工しました。西暦で表すと、1834年です。

但し、先に述べた架橋記念碑には、天保五年と記銘してありますが、干支は壬辰となっております。天保五年は壬辰ではなく、甲午ですから、年号と干支が相違しています。当時は文書や鳥居、墓などの建築物には必ず、年号と干支が書かれています。つまり、当時の人は、干支と年号を間違うはずはありません。この相違について、地域研究史家の鶴田文史氏は、次のように分析しています。

元々三年に竣工するはずだったため、記念碑には、天保三年壬辰と刻字していたが、何らかの都合で竣工が五年になった。この都合とは、天草で、天保三年に大一揆が発生している。このことが架橋完成を遅らせたことに関係しているのではないか。この時記念碑は既にできあがっていたため、三に線を入れて五にしたが、壬辰を甲午には修正できないので、そのままにしておいた、と。（『国重文 祇園橋』参照）

修正がなかったとして干支を重視すると、天保三年になるので、祇園橋の竣工は、三年説もあります。年数字をよく見ると、三を五にしたような、あるいは傷のような、微妙なところ。す。（下写真参照）さて、どちらが正しいのでしょうか。



架橋記念碑

左上写真、石橋としか記銘されていない。  
左上写真・天保五年 壬辰と記銘してある  
左下写真は、年数字を拡大したもの  
三を五に修正したのか、それとも疵なのか



文化庁登録には、三年説が取り入れられています。

架橋竣工は三年か五年ですが、それでは架橋に取り掛かったのは、いつでしょう。確かな史料は存在していないので分かりませんが、地域史研究家の鶴田文史氏は、戯曲「天草の大石橋・架橋物語」で、取り掛り（発起）を文政十二（1829）年としています。そして、石切りが始まったのが、天保元年、架橋工事開始は、天保三年、そして完成が天保五年として、推定されています。現在でもこれだけの工事は、ずいぶんかかると思うので、実際はまだ長い年月を要したと思いますが、どうでしょうか。

架橋竣工は、いずれにしても、明治維新が1868年ですから、維新の約30年前という事になります。天保といえ、水野忠邦の天保の改革（天保十二〜十四年）が行われていますが、改革が行われたという事は、つまり世の中が正常でなかったという事です。

大塩平八郎の乱（天保八年）や、各地で大規模な百姓一揆が起きたりと混沌とした世の中でした。またモリソン号事件（天保八年）や、清国ではアヘン戦争（天保十一〜十四年）が起きるなど、外国からの脅威も高まっていました。

また、幕府だけでなく諸藩でも財政危機が高まった時期でもありました。

では、天草ではどうだったかというと、総人口が十四万人を超え、超過密の上、異常気象により、農産物は不出来で、庶民は困苦にあえいでいました。また、流通経済が盛んになってきたため、金を持たない農民は、銀主への借金をし、その返済ができず、田畑を取られるなど、貧富の差が大きくなってきました。

当時は年間一人一石の米が必要と言われていました。また生産性も低く、標準で一反で生産できる米は一石だったそうです。この米を全島民で消費すると単純計算すると、天草は二万四千石程度だったので、せいぜい二万



かつて祇園橋袂の神社境内に、南蛮えのきの巨木があったという案内板

余人が妥当な人口と言えましよう。

しかし、百姓が生産した米は、年貢として取られ、手元に残る米はわずかでは生産者たる百姓が食べられるかというと、そうではありません。金に換えたり、借金の返済にあてたり、米は、正月と盆に食べられるといい方でした。そのうえ、異常気象による災害が起き、生産性はますます低く、かといって年貢は納めねばならず。

このように、困苦に喘ぐ天草では、騒ぎ百姓騒動（一揆）が頻発するなど、世情は混沌としていました。

天保三年からは少し後（15年後）になりますが、弘化四（1847）年には、第二の天草の乱とも称される、弘化の大一揆が起きています。よくこんな時代に、大事業ともいえる、祇園橋が作られたものです。

天草は、一般的に天領（幕府領）と言われていますが、私領時代あり、また、同じ天領でも、専任代官がいた時代、長崎代官や日田郡代の兼任時代、島原藩主兼帯時代など、目まぐるしく支配者が替わっています。さらに支配者は三十三名もの人が替わっています。これもまた、天草の不幸と言ってもいいかもしれません。

この橋の架橋当時は、長崎代官高木忠任兼任で、天保三年三月に、日田郡代塩ノ谷正義兼任となっています。さらに、そのわずか四ヶ月後には、長崎代官高木忠篤兼任に替わるといふ慌ただしさです。  
ある意味、幕府にとって天草は、厄介者だったと僻みたくもなります。

「参考①」天保二年 この歳、郡中総石高二万四千六百七十七石二斗三升二合一勺、

総人数十四万五千八百八十八人なり（『天草近代年譜』松田唯雄著）

「参考②」天草支配者の移り変わりについては、HP「天草探見」（管理人・拙著者）を参照ください。

南蛮えのきありし頃の祇園橋

絵 上中万五郎

『国重文の祇園橋』より

